

911.3
卜
中

東西書話

911.3
卜
中

東西書話

東西夜話 中



今年ハ五洲の事稲乃事也ト云テ世子更新
月も見えぬや瓦を叩ききり旅するの事
さよふ中川の神ては志を成すの事めよ
ねさるね旅凡乃志は神て今ハ海をんを
おのれんといふ事ハ海をんをいふ事か
いふ家ありんじりハ吾輩の事ハ藤江
乃波松子古里の母をむおりハ神の事ハ乃ん
かきひあふハかきこよゆらハやあひん

世にももろく海に身をまかせし人ありては
むやうに世に漂ひて生かす人乃世のつひ
たすけにまよひてし人ありては世にまよひて
南むきてて居る人ありては世のつひ

白澤

秋山亭

豆有角ももよわくしお魚はのち

乙運亭

はちた乃あるしとやみ十年秋も色ては

老後のまよひしとやわとつと秋志秋もま
そのゆ言秋んさしとやわとつと

秋山亭子よ後しとよ秋山亭

外鼓亭

秋山亭子よ後しとよ秋山亭

先師むしと湖南の曲家亭子ありて

是も水神のありしとや秋山亭

秋山亭子よ後しとよ秋山亭

秋山亭子よ後しとよ秋山亭

秋山亭子よ後しとよ秋山亭

雨村のぬー 慈王寺とあるー 昔と秋とるふけ
地と親世喜の美雖ー 今もたは清水の流
いとささるく 傳よ水良の石橋とて平し
新んきと 鴉鳥よ秋の清水ぬ

泊とりのふと是とも七里とるもあなとるふー
松亭のたぬー 今もあもて風雅乃んさー 涉
ろくさつと 清感しとてお地の人く 雲
見るとも 清さるふの清もく けうすたわぬと
泊とるゆー やさそれ居乃 登

五大力菩薩本納

昔のたふよやさー ぶあ乃不さぬ

巻終

難波津よ 暖や伊訥の山さへ

久りた申お一 事や神さへ

あまののけはあをさ 山登り能順の伊訥乃

山探るを自賛たやー 今そのうちやうに名月の

向津地きりりと 神のー 二百の神はふふ

侍とんと 法師曰連よ 事とさへ 今も 次家能能

よわ是跡いり難波津の跡乃言葉よりりて侍
約乃山標とかきりきりるる吾能徳の作意と云
とけあさるるるるるるるるるるるるるるるる
かきりきりるるるるるるるるるるるるるるる
新りらんよわ月体神標とよきとくろるるる
んをさるるるあちりり樹ををを味を味を味
感んまてん——さるるるるるるるるるるる
管部を返部すも先部一少くも先ををの先
をさりて「名月形を」とんてて棉をこけ
とかりと終結「と志るるるるるるるるるるる

本語のなるとさきりりしをの終り作意をさ
ゆる也連示るるるるるるるるるるるるるる
さるるるるるるるるるるるるるるるるる
頼政の白川の事とハ巻数なりと云家
判きり終りて存作乃新りもさるるるるる
とさるるるるるるるるるるるるるるるる
又さるるるるるるるるるるるるるるるる

名録

名や源部乃枝り——名部 乙運
本わ——名部 乙運

藤樹や卯の花もあふ山伏外故
る血鏡の跡もあはれ 蓮の市
夏乃日也又てさくさくかんこ号 如水
昔も母や廿三夜乃山峯の月
ひやくと揃いの京トヤと野の越 雨村
大名も沖火下り泣きわらう曲
飼鳥乃心鏡もさくさく一在りぬ 秋吉
竹の露も草をなまよそめてある種は
夏乃日也一重も玉もさくさく 似猿
浪人乃藤屋もさくさく乃柳 伏

昔も麦もおろし牛乃尻目汁 包之
踏移てを若もなまよそ一さくさく
折てさくさく山もさくさく種も百舌の鳥 心汁
白もや稲のそよお乃扇もさくさく
早稲の鳥も柳灯もほろろ乃先 求聴
児をさ乃門をさくさくや路の鳥
おろし稲もさくさくさくさく種もさくさく 松守
さくさくの種もさくさくさくさく 兼の鳥
さくさく板もさくさくさくさく 未及
学文もさくさくさくさくさく 如音

馬つゝ乃耳ううやまー抄字 仙居
十とらわらる子馬やうー格杖賣 如口
多浣て他を説子紙乃出入の由 以白

今日とる魚はよも富士のうらまおもむくよるを
うう稗の穂のあうくそと記するはいと新しと
思ふと穂に馬よはふまらるおれと乃知も葉稗
とらふまのつらやとそよまに得利迦羅と
さぬんより世の中かうくうまきとわかん
さる休能遊歩乃志りるて稻行乃名井

蘇きうしんもつひのんちうまはひてん
赤子もそく乃葉田やひえの秋

遠中丁考

立山や流り岩崩野乃を信ず

富士

け地乃んくふよ出むういてかううーちよ舎き
表ちハ流水子のそそく舞踏の穂のまを机の
まのらよはううさる月もあへくま馬も停
かむ機弁の穂まといさや後を懸まそよ
机橋も志く後福まさい話のそら
あらん

曾戸有黍

二川亭

唐黍乃在赤子かよひてや市の秋

山王社家

随柳真行

神の本を猿乃深き秋の色

魚津の求懸はけ地よりまゐりて人も揺藤家
もまゐり神乃おろしき神のくまの郊外乃精舎
よりりてけ目能舎秋よりまゐりて秋を先ま

東南よりまゐりて秋の色ゆき山よりきて

たりし乃まゐり神や秋乃深き

苗の舎 柳益身なり

舟より秋や存りし又子の音

秋をこの物坂や神乃ぬ神次

秋話

あまの能言なまをまゐりてりしは秋の
回志し浪芭蕉門の能言あまの能言
能言なりといはる能言ままをまゐりてりし

句ありしや能徳ハ能徳の人あり連言ハ連
 言能人ありし言能ハかりのされや能ハ言
 能乃強業として連能のしつ神のありし一を
 法知の能業はあむしつ時吉徳津言能社家子
 ありし神て能言能はありし人ありししつ
 二能能言の能なりとありし能のありし神
 を法知ハ一生連言を能なりとありし能
 能徳なりしとありし能なりし能なりし能
 能夜の能言能なりし能なりし能なりし能
 乃言なりし能なりし能なりし能なりし能

能ありししつ能言能なりし能なりし能
 連言なりし能言能なりし能なりし能
 乃言能なりし能なりし能なりし能
 能言能なりし能言能なりし能なりし能
 能言能なりし能言能なりし能なりし能
 能言能なりし能言能なりし能なりし能
 能言能なりし能言能なりし能なりし能

一能言能なりし能言能なりし能なりし能
 能言能なりし能言能なりし能なりし能

世乃人能徳ハ能徳なりし能なりし能
 能化を能なりし能なりし能なりし能

場をと葉して子よこの折に葉な穂ん

一白の曲をてはてしなく

こち乃と鳥をよんるうあれ

其まをを瓶乃とまきれ嗅じと

名孫

秋の目やゆして夜乃言斬二川

雪乃目をいよく并に花を

嫁入してまの社をよ斎に 芝居

朝にほやき海に起てお散り歌

そくして又葉子をく小帳く曲 一康

わんきん子海にわ梅乃くこさ

目乃色子言ゆてあゆふを學るを 林子

かゝれ世よ瘦てゆくはく系尻に

誦子んて半も遠行遠あふ 白糸

行ぬる時を耕まや葉の也

高岡

十文乃たふし一六もやちさふたうんいせのあ

みあまい竹わて跡よけるを山田乃葉山子

こゝに隣り乃々秋も今更けの山に坐るがた
笠を平ひて足さすや家にて葉は

唐草紅アリ

野角亭

深うけて葉も唐草の山に日永く由

篋具真好

養老新

瀟々ありて接葉の葉は乃昌小

酒家也

丹岫亭

新酒よふふ春ありて雲乃月

河菱亭

秋もそや秋子階のちりり

けのハ末乃秋をうんとし人をお被と
秋葉の模様子とくわきる風情ハ
人乃こころ秋さうりやあつん

小人亭よりふ春乃あまの信ありて古父乃秋
見とそ人すもやうき家子も胃おるまじも
物ううりてをさし子なる秋やまの秋乃
あり秋子源一

おやのまも秋る唐草一庭乃雲

布袋贊

虚舟而持

穉きこゝの蘆の中一羽あふの言

松籠り通

西の柳のくく人休むるはるすか 芭蕉

少狭面く通はぬよけ敷三日月もあつてな
連ふ妙も祿もく種も葉もんむりくく
是も更もよやまむ六月乃不常候とく
てぬしさる候式もはくく種も人よ芭蕉

余月とほくく種も葉もなと柳一多味
そくく合もく葉も葉もくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくく
あくくくくくくくくくくくくくく
おの種も葉もくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくく

正の終日より先月とあるもすううん見むと云
 人なる人患の故におもてても先うう一と云は
 事かあつて一ある人けるをかりし一終あふ
 せし終きりちとてまたとて一連つたてしや
 古語古語の終つてとてさうのもあるは
 世と縁縁後と縁縁人の縁縁奇よと云は
 ありとてその終つてを新しと云はつて
 係判が終つては他なくを適よと云は
 古語を志し終つては終つてはと云は
 人乃報と終つては不自由なる事と云は

先師の心を居乃ひてとては
 うぬよと終つてはか終つては
 りと終つては終つては
 庭ちまも入師とお白也と終つては
 夫ももあつて父ももあつて
 さいとてのたわとてとて
 附子ともあつては
 そのとおのさう一は
 つとてあつては
 そと終つては終つては

なり東之乃 陽をさるは乃字よりもあるの
字よりもあるは乃字よりもあるは乃字よりもある
乃字

先師生を乃 附方をさるは乃字よりもあるの
乃乃乃 陽をさるは乃字よりもあるの
乃乃乃 陽をさるは乃字よりもあるの
乃乃乃 陽をさるは乃字よりもあるの

乃乃乃 陽をさるは乃字よりもあるの
乃乃乃 陽をさるは乃字よりもあるの
乃乃乃 陽をさるは乃字よりもあるの
乃乃乃 陽をさるは乃字よりもあるの

射水川

乃乃乃 陽をさるは乃字よりもあるの
乃乃乃 陽をさるは乃字よりもあるの
乃乃乃 陽をさるは乃字よりもあるの
乃乃乃 陽をさるは乃字よりもあるの

先師生を乃 附方をさるは乃字よりもあるの
乃乃乃 陽をさるは乃字よりもあるの
乃乃乃 陽をさるは乃字よりもあるの
乃乃乃 陽をさるは乃字よりもあるの

乃乃乃 陽をさるは乃字よりもあるの
乃乃乃 陽をさるは乃字よりもあるの
乃乃乃 陽をさるは乃字よりもあるの
乃乃乃 陽をさるは乃字よりもあるの

是亦八寺社の説の段不むつりしを述べ其人乃さゆ
 ころそわたりしきりる色先妙の生あふみきりし乃
 亦変化あり死後の亦変化も二事いふもむじりん
 日徳乃亦変化をささむしりて次かゝる附方社はも
 了りて存大要も及ばししを亦変化の家もあふん
 ころもあふん

八月十日日了あふんしりて
 多依の月了あふんしりて
 二上山社社名は名社とけりし
 月了あふんしりて言圖乃むしりてあふん

多録

考乃あきいりしりてやん乃とれ 十丈
 了りよ社ハ身社うりしりて社
 風乃あふんしりてやん乃とれ
 藤の根社草乃あふんしりて
 了りよ社ハ身社うりしりて
 踏りてあふんしりて
 了りよ社ハ身社うりしりて
 了りよ社ハ身社うりしりて
 了りよ社ハ身社うりしりて
 了りよ社ハ身社うりしりて

考やーえちーしーきふ化縁の間 市仲
 猪の子を接納し梅乃ふほいし
 神祐やーしーしー草の由來不出奉
 か了大乃あ終り川や梅の景は 河蓋
 出村よ六鶴ねも人や夏乃秋
 香を志めて下る事や美の心也
 夕立やーえちを終る望乃了白也 丹岫
 入お乃あしと乃さしとやーゆも也
 梅子年のともやー多羽回乃凡の事 笈吳
 初て終乃さしと乃大燈の念う也

夢川き目や梅へのはる人こころ 乙双
 年奈乃懐さむしー梅の聲
 二藤月意うさきもつれ并一の枝 虚舟
 馬戸まよふ終る終まり月の月
 谷まぐら水のまよふ終る終る 巴三
 湯あしひまこる乃いなきもさあれ
 雲お乃ふをゆりーや玉すらす 枝動
 半おあきく角を氣まよ終る也
 月おあ終る川がわて出終柔橋か 周以
 まきおあさきや果いん梅の毛

薄の葉折る重敷原一池の面 政之
 吹ぬまゝに散原おりにらまき灯籠
 侍りりくくさくくを備へたるも 蘭水
 名月や付多とるくむものま続
 甚甚翁乃
 多糸をぬて
 色甚意子難波乃菊の影りて 東白

有碓

多胡待月

おほいれ夜に月ま川多胡の極

名月遇雨

青の葉折かたれを風中雨の月

今や月なふく一蓮葉ちよすもく終てをぬく
 雨乃月を常ちとる小葉はは毎一葉乃は法
 とかくハ月の極乃をも吹なむとあつと
 きあかりまきくく山井あわくふ

二かなと雪の月やは法のを母

高星のくく山枝を先もきとくけ浦ははと
 まく終てまきくふとふの月もか法時やと
 三枝の真もむなりかしくをとおむかめて

尾城の名月もかろ風もあひ侍り書物
兼好乃味もとろきよの月と申はるる世を
除るもよー思ふもよーいん坊好すよーいん也

かろ笠や浪谷こーてるらん月

十七夜ハ宵のろ月晴て嬉しき浦輪の月
又むとく人くもよい初るるよなやあいの
浦の吹あ終て赤よ午の波も言城きよじ
了ん好なる浪

おわきとや神子月ち波の毛

は浦を氷又縮とて世も名体はとておかけ
乃むくをやーおまもくと輪とてゆくと終を
浦の筑屋乃新好るる也

は浦も冬もおまもいりーれ

拾頁ラ

松ヶけや神草くけて貝ひろ飛

阿尾の詠書ときここーおのころ是より一里
えりわ乃磯山を庵とてあけ人く乃凡船の
右をなかりーろを山里乃所ーいんを志
まじやとゆりーさかへおまもいん

小なり一石顔ハ百歳ありて一念も是とぞ
すし其ハ新古自在乃能修功といふ趣一
一白乃二白もはるる人ひさるる念
答ふと古ふおもむきより附きたる又新一
白より一書一うたきる白形ありしき
人乃よふ女房持きし人ま下女おれ
こしやうこたぬ人目と志のすまよふ古く
しきあしりしきあ世天地の變化とよく
神ハ善惡新古善世子のそとするもの也
新古善惡一神なりといふ人ハ片腹
とて人ハ片腹とて人ハ片腹

海峽

ふふらけいふ体とう神て又さるる
けわーう休木の浦津に流谷おむりも
見とるややこころ乃人くまか
山陰子け目乃あけ行む

流谷おむり志ぬくわう神

名録

一日おむりや林子後
凡の名録そそく流るや小

一谷乃家教志物きりわねとり紙

苔の巻子経又はくす 於禪所 海人

難水子弁乃學下や子月為

七事所由何いや満て本を乃を 不流

心休乃ちまや花のり野栢

白州や就言も花も言より花

法園 寐てぬれうらハ佛ハ 玄指

り後とてしし之寐とや益の月

備燭乃いしりや梅乃蔭子紙 胡桃

蛸や彼き夕日乃あんの凡

なさけたまふ瘡乃神や蝶の夢 君之

名月子白まき何そ葉乃花

苔所りや子志とけ 柳 瓜 瓜 梨

飯の考乃戸病子砂とや庭の萩

一二輪はまて葉尺了夕日かれ 野刀

又事ととるくや 泣き大雄ハ

一糸乃凡子ひしき赤を在まらぬ 温凡

水汲の神子針しるほきとるハ 乙雀

放生之津

け津を参る古乃入江に流れてるよあふれ
雅の地なりはあうくくよあそまうい茶月結
朱も月のはりめかまじむ

名月乃乃月も園あわなこの備

松舟一亭

楊弓のえ海一廣しむまよ

存証

け津を参る古乃入江に流れてるよあふれ
雅の地なりはあうくくよあそまうい茶月結
朱も月のはりめかまじむ
名月乃乃月も園あわなこの備
松舟一亭
楊弓のえ海一廣しむまよ
存証
け津を参る古乃入江に流れてるよあふれ
雅の地なりはあうくくよあそまうい茶月結
朱も月のはりめかまじむ
名月乃乃月も園あわなこの備
松舟一亭
楊弓のえ海一廣しむまよ
存証

琵琶

琵琶乃律五音一きる調子小 万子

橋

粟子解小音乃可一性や神氣繁 考

大聖と

これ策非入湯のより山中より文法之事
子桃妖のぬもや子三母のよ一きる山中
乃葉も子おらんかきよ六行つくて出さる
百後之れを文乃返一子

おくさな事より津葉乃山返

細長木園

喉通る名や不そるぶの園乃園

三國

水音草庵

けは跡もかたはれおはくちりて侍る事
よ一あよはきては遊みんをどめ給ふれ
とく是地をいぬ人をおあはれお給ふ
たりしかたをけぬる乃さういさめて世懐の祝

とくしを志すに能くも又さるるの也

昔乃をふやとちりしむても故の凡

之を新保の人くま申よ入に

魚をくく凡船のあきも秋の

心と免つるしを結ん

秋語してさやゆきも秋の言

寸松亭

帆子あまる凡や生る候序乃秋

昨襄真行

日和山

ひよる秋雲やとくめく日和山

胡全号

胡全本名古全

今以月从古

月体於てみまようむ三国川

表紙

凡雅な事とて方何あはし人のくを承やう

をけ子よ一向形曲を流むはあうけまのけ

も附句ハをそなめといふと自賛ハ文七句よ

へく今言を新自賛乃白あや

蒲山もむ乃改まよんてまのり

律一 明日をうたふ衣 たり

是ふと無人乃名句といひし孫にあま乃正月
二月三月とけりけりて孫の明日を感て
おろしきる佳きあまことと孫人の體め
ちるひ一字一息のまこととを相まてしむ
明日をといふ不ふけりてと孫の相まてしむ
をの體もたふすりて天也とて相乃上と
りまをそりて相乃乃と孫の相まてしむ也

二 一句作

門乃かまふ一 言のちへはく
たまふこといゆりてまを相まてしむ

一句味

息乃であやうハあまの凡
ま歩ぬる門を鼻弾一をく

けおふも一句上句一句の名人といふもあはし
附句ハあふひう終て葉まをるお方終て何とて
かとも自在なる也也作若ハ作ふやきて作
ちよひ味もハ味もや終て味もあま一とて
あま化をんてよふもあまも高あたるる

志く浪をの統くり城くまふまうふいやと

名録

ほくし種や合息くくとと物秋水音
猩々を赤らんほう乃こく統くれ
をこふ香も鼻こそはゆし枇杷の香
久しやとゆふ人んうる山さくら
胡全
次の月影かよひもせり一衣羽織
傘よよ空の咲きふらそそ統うる
ゆゆ笠をこぼりくちくちをんかれ
昨囊
栞藤田や子苗栞おら扇形

吸あ乃膝よちりまきる木をさくれ
白旗のいちこをけよ下かぬ 布留
玉棚やはたえつわく余水の橋
を川あとおのたつふの火煙し
今かたや馬らあよさくら子突 琴之
妻乃入の酒盛ゆりくさの味
おとわ子や歌のそく統て拍子やけ
秋のおをそ弦のぬる乃さ一笛才一閑
燈凡乃けちたてふや一耳乃奥
入船や栞り香ちくも志帆行帆 知子

神尊乃かざりし降おと小面汁
二三十柳一よ何一をさかろるれ 寸松
うひらるとと二本さう一あつる扇くあ
卯の急やシヤ眺めくく一て稻荷山 芦凡
猿丸乃 麻生時中一足あけ皴
連ふあゆハさうさうや也をく一女次 梅新
みんもさう終えあつ終秋のさ言
之月さぬ乃行ふお傍也お佛堂 流水
えちう終てさうくお傍や一雪の弁
お当乃子もさうさうりかろるなの言
重景

室暎のむかきし出る裸う菊

福居

和木亭

土賣お乃中よ葉んるある川

えまき亭

暖簾原の奥スそりむ鶺鴒集

忠元石山

けしき定山さる東小よひらきく言條の遠夢
よ朝日乃雪ととえんるし是相川新川よ子

ききし乃、孰をえんおのれ、田家山莊をくゆる
すのあこわちくきりしや、おのちりの月のみ結
た、ささやな、神は、こゝ一、水乃、あら、神を、ぬじ
こゝよ、森を、鳥となし、ん、極の、言

九月廿

り、もの、を、秋、乃、こゝく、う、是、羽、川

立、を

け、る、わ、ん、を、を、際、な、り、小、去、月

帯、強

あ、る、人、の、口、附、り、は、折、紙、を、え、な、る、お、り、中、か、じ

い、ふ、う、と、れ、き、け、り、し、は、ゆ、り、白、く、乃、有、と、決、意、を、
一、り、し、を、折、紙、の、端、は、お、よ、志、し、り、と、し、る、也、さ、神、を、
折、紙、を、生、と、ん、な、神、を、附、り、は、人、と、人、乃、お、對、り、
あ、り、し、時、は、折、紙、な、り、後、一、句、一、言、を、の、神、り、な、情、
を、い、わ、り、し、も、の、也、は、ゆ、り、し、は、あ、よ、深、流、し、て、さ、り、
乃、人、の、對、り、と、神、は、を、人、の、句、は、口、紙、を、れ、り、し、り、
是、は、折、紙、を、ん、な、り、わ、り、是、は、味、人、な、り、是、は、柔、弱、な、
是、を、思、病、な、り、り、と、家、人、の、通、を、さ、り、り、
乃、其、妙、り、り、て、分、別、を、む、と、さ、あ、り、後、さ、神、を、
家、附、り、む、り、り、は、け、り、り、は、け、り、り、あ、り、り、り、り、

物にちりんとおありしてそのうち家人のきけ
と附るせん乃手取よりお終ひをもちてありま
付もあり候てよろしうはけもありよふもあ
しきもんはさくめ候とて終人乃附より
むふはひのよはきとてよろしうお終ひな
と書きて候ん乃きけは書の内終ひお終
あしきをいへりわむのうしき終と神念乃
何やより書きて候しき終ひをの終も果はあ
まのりをとてりわむのうしき終ひをいへりか
お終ひもてお終ひさすりお終ひのうしき終ひ

やしきやうかめりよお中しとありてさう
よかめありて終ひ一う乃手取不さくしきと
て金銀酒色乃中よわくあ金の百あなを
こすしやうしき終ひをむ二十あはしき
はうしきとをの終ひ西にさうしきやうしき
を金お終ひさやうしきなりお金の百あ
なをさうしきや終ひをさかめさうしき終ひ首
のたふしやうしきとて終ひを金お乃手取し
とおありて世よ一終ひのあやまわり何し人
乃書をたうしき人乃手取めをさかめし人

も安し一方におなりさういふはしむし折紙あり
 そあふむつう一ほうものをの縛りん乃よま
 をして一庄乃人を信し然て下はすれこを
 ねとんつとさもを縛り一きん乃金ぬき人せあ
 しく是ふハ吾の乃借授なるくは縛り銀一板
 乃欲よたるを縛りしおくたり一縛りかくし
 りの借後のお生をたな縛りていハお生を借
 借とあふり一なるあへ一は一版乃お紙と
 縛路乃人のかこまハお一きん也

名録

むさし野色戸辰をまうる蕙^カの馬 和木
 山乃乃入目跡見やるゆ厚るぬ
 浪広るの舟をる色さくわを牡丹
 線香まむく人も乃纏うし由 丘芝
 清くお虫の根を啼うつし由
 糸糸くくやは縛りたる凡し記あり
 神籾や根芥りくもは跡立列を 松文
 枝乃あふ帆板はたし一はくまは
 若さる仁王乃袖や書うく

寐轉ひしりし子い身や公用干 羣吠
 仕立これおまゐのやはいやはのふ
 峯乃大姑んかそさや言方の中
 車るるや反古さうえ乃患空を 祐子
 投ぬま繩乃むむく之向ゆけ
 名月や股川なうく勢田の徳
 小普積もまのたうこよな能重 元春
 鳥帽子着るるお小吹るく柳木
 去年トわも甚よ去年トわぬ独流略 踏を
 飯乃考りや吟絶ぬさよのむつうお

梅子折てようふ同ささや玉柳 洞聖
 草子藤さのう絶てしと新や秋の露
 若ふまよ子と寐さくさか因何ト 普全
 名も新そんには花のこねる寐小
 今ぬ宿もあひしをせりー 露を花 順志
 歩ひしとや忘るく祐神さくそ糸
 をと山やん乃あゆむをんよの 祐人 祐え
 穂子ゆくくし川膝のさむま音元
 一舟乃目新月んや枯丁文 由弥
 是秋候て約籠ゆさう 梅藤吉 元休

去冬より一校に之月し十程一彦

玉江の橋

秋やも海邊に玉江や芦の葉
一あはれ被ふ人の中玉江乃橋乃上 水音

舟中

帆山寺

舟名傳へあつてふりけて帆山寺

妙國寺

二月廿日似合ふ^ス一あはれ

を近き

をりけて初なる君乃月夜

毘沙門堂

當山會

神財由ふとくそ馬よ新

寺

お青田の家か三國子岐をあらへ能徳ハ
あはれちりしとおもつて福をよあはれ十
くは能徳をけむし能徳ハくをくしとおもつて
今に能徳中よあはれしお初んくも能徳ハ

さしむくもとあきく 能登乃よむむのこころ
を忘れりとは如く 能登ハ後よさむむのこころ
福島の能登ハ後よさむむのこころ
いひ舟中の能登ハ後よさむむのこころ
さしむくもとあきく 能登乃よむむのこころ
さしむくもとあきく 能登乃よむむのこころ
さしむくもとあきく 能登乃よむむのこころ
さしむくもとあきく 能登乃よむむのこころ
さしむくもとあきく 能登乃よむむのこころ
さしむくもとあきく 能登乃よむむのこころ

名録

果舟よみことばてむ山さくら 幸近
草薙乃ぬれて後よさむむのこころ
さしむくもとあきく 能登乃よむむのこころ
地花ともなふはく 乃向く為 臨川
と氣乃氣と馬と いた後之言
手虚色や丁魚ちかておの行
南極の残るむ日たむるむのむ 栞摘
病一さハ本の乃月乃出の入
いそしや幸一乃後言のむのむ

身もあらもあらんしは藤乃家次 虎投
ふ後嫌れ凡乃きぢり残のほり
唐紙乃一重もうふり天の河
よあけ物ゆ香もたし物さき 杉柳
ゆくまを志す藤とはとく物ゆ
員一や杉板を角もみささ
ハ朝や日私ささしる 榜乃色 金糸
物懸も木を種て沈一懸の雲
つる物ハけりて葉も流乃ふ名也 白鳥
ちんくも水も流るく 杉那也

藤の虫や帆うけぬ船乃あゆみ 桃水
板ゆふハ何うあつてそこのも
あはる乃思ふさやうりぬさう乃飛 雀
けさうこ子もさるまをく家紙子
ど紙とことさな苗あひのく野柿小 菜人
白梅乃白ひもつけよ化粧うか
涼一さや板乃下りえほら 可及
鬼舟あさうらんまおき下白小
むらんとく人さうあお喰まも 不ノ
娘一また家紙中たうくを紙の書

起く乃顔さ一柳ぬ君の私
 不性きたにひし何なる様々ぬ 何悦
 身持中一をじふ乃小雲原
 今もいんを鼻をらりせしむかし
 君の毒や片子子あたるお佛堂

佳本

巻紙

ある人曰新乃物も海子に此のふれとす
 ぬ紀りあやうなる中よ殺句も西也かた附
 句も志あんとて中よ以新乃のなすしとて

とは物も曰志く原紀りかを亦其人は新
 て毛既もを何とのうさ新共んをあり
 をまて自由なるととさるふ自由なるは紀
 百五十句中よ殺句と二三句よさへくは
 今餘ハ其附よ新そとてあるんハ唐よ何るんハ
 実よあらしを新右乃次あを備を原そく日お
 乃変化よあそよ新紀の何と何乃句ありとを
 家もさうりよとをくはく一むく一徳徳とてぬ
 不となうこと味やいさわとれむしとく
 家ん新家と案一きりんをもぬき乃

相を案と被たそはあましく家も志こふお
 と家とぬこりたりし志は終とも定ぬ風象
 ち子あや付ちよあふりハは終もあまきんん
 今も終えたりしか乃二と分は凡味を忘
 きてゆくお終を上子たり下子なりと世情
 乃原名子あひ侍るを乃志終る人乃月よわ
 りにあさまりとて人ゆらん終ん孔子ハ儒
 不きて儒よよりハ終ぬを佛は終て佛
 よちのよ中よハ終んことを乃キよりわたり
 を終せし所ををよりと終ひく言終は終

乃自慢もその乃よをそへはさる事なら
 子人休か先人をそ終人乃言終は骨の心
 と終て世世よあさまりと終造中ハハ
 終はあや志何をよへと終てても終よ
 る一かむるも終も終も終言終は終え
 能終も終る言終乃終一と終志終

三終の名終も一夜二終乃

はくからる一聖板山の境

いと志らるる終も終を

家終よ志らるる終も終

元祿辛巳十月十二日駐筇於湖
東五老井幸設先師之會齊而
斯日點檢此集者也

采 汶邨 毫



森 許六 校





采 汶邨 毫



森 許六 拔



